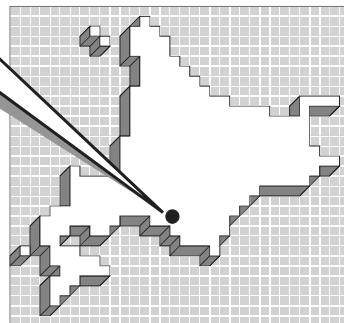


連載 わがマチの自慢 №.30

平取町

トマトでまちの元気づくりを



カントリーサイン

平取町は、日高振興局管内の西端に位置し、東西五一・八km、南北四一・一kmで、総面積は七四三・〇九km²である。地勢はおむね丘陵で、丘陵の間を沙流川とその支流が南北に流れしており、河川流域に集落や市街地が形成されている。町の北東には日高山脈の最高峰幌尻岳（標高一、〇五〇m）がそびえる。日本一の広さがあるというすずらんの群生地もある。総面積の八割を林野が占め、耕

沙流川流域は多くのアイヌのコタン（集落）が栄えたところであり、アイヌ文化を色濃く受け継いでいる。町ではアイヌ文化を大切に継承し、

受け継がれる アイヌ文化

地面積は六%ほどで、河川流域では水田作、丘陵では畑作や酪農が営まれている。人口は約四、六〇〇人である。町の中心部から最寄りの苫小牧市までは、国道二三七号線、日高自動車道（日高富川IC）を経て、自動車で一時間ほどの距離にある。札幌まではおよそ一時間四〇分である。公共交通は都市間バスまたはJR富川駅（日高本線）からの路線バスである。

二風谷で當々と伝えられてきた「二風谷イタ」（独特のその理解促進と普及啓発を積極的に推進している。二風谷地区には復元されたチセ（住居）をはじめ、文化博物館や資料館、工芸伝承館、沙流川歴史館などの施設が集積した「二風谷コタン」が整備されている。「こ」ではアイヌの歴史や文化を学んだり、体験したり、伝統工芸品を購入したりすることができる。



復元されたチセ（二風谷コタン）

アイヌ文様が施された木製のお盆と「[風呂アツトウシ]（樹皮の繊維でできた織物）は、北海道で唯一経済産業省の「伝統的工芸品」に指定されている。

施設園芸を中心とする農業

農業が町の基幹産業で、全就業人口の三割が農業に従事している。

「びらどりトマト」と「びらどり和牛」が代表的な产品としてよく知られている。これらトマトは平取農業の柱であり、近年は、JAびらどりの年間販売高の五〇～五五%を占めている。トマトの後作として、きゅうりや寒締めほうれんそうの生産を振興しこうれんそうの生産を振興し



寒締めほうれんそう

大きく減少した農家数・農業経営体数

一〇一〇年農林業センサスによると、平取町の総農家数は一四三二戸で、そのうち販売農家は一一四戸である。農業経営体数は二三三経営体で、いずれも五年前(一〇一五年)に比べ減少率が一割を越えている。農業経営体の経営耕地面積は、三、〇五八haで、五年前に比べやはり一割以上減少している。この結果、一経営体当たりの経営耕地面積は一三・三haで五年前と変わっていない。

JAびらどりは平取町の他、日高町の富川地区と北日高地区を範囲としている。

経営耕地面積規模別の農業経営体数は、「一～五ha未満」が最も多く全体の三〇%、続

表 農家数、農業経営体数、経営耕地面積の推移

| 区分 | 単位 | 2010年 | 2015年 | 2020年 | 増減率(%) | | |
|---------------|-----|-------|-------|-------|-----------|-----------|-----------|
| | | | | | 2010/2005 | 2015/2010 | 2020/2015 |
| 総農家数 | 戸 | 347 | 323 | 243 | △ 3.9 | △ 6.9 | △ 24.8 |
| うち販売農家数 | 戸 | 297 | 288 | 224 | △ 1.7 | △ 3.0 | △ 22.2 |
| 農業経営体数 | 経営体 | 303 | 300 | 233 | △ 5.0 | △ 1.0 | △ 22.3 |
| 経営耕地のある農業経営体数 | 経営体 | 300 | 297 | 230 | △ 6.0 | △ 1.0 | △ 22.6 |
| 経営耕地面積 | ha | 3,911 | 3,977 | 3,058 | △ 4.4 | 1.7 | △ 23.1 |
| 1経営体当たり経営耕地面積 | ha | 13.0 | 13.4 | 13.3 | 1.7 | 2.7 | △ 0.7 |

資料：農林水産省「農林業センサス」「世界農林業センサス」

農産物販売金額規模別の農業経営体数は、「1、000～3,000万円未満」が最も多く、約7割を占めています。一方で、「100ha以上」の規模では、2020年は2015年よりも約半減となりました。

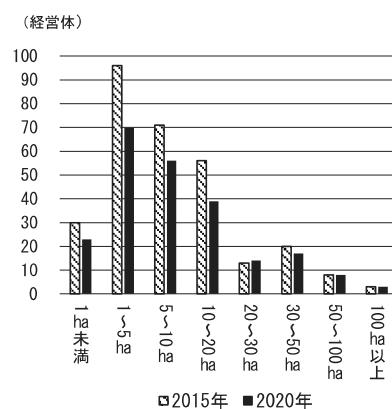
「500万円～1億円未満」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「50万円未満」の層は、2020年は2015年よりも約3倍に増加しています。

「10～20ha」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「1～5ha」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「1ha未満」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。



農産物販売金額規模別の農業経営体数は、「1、000～3,000万円未満」が最も多く、約7割を占めています。一方で、「100ha以上」の規模では、2020年は2015年よりも約半減となりました。

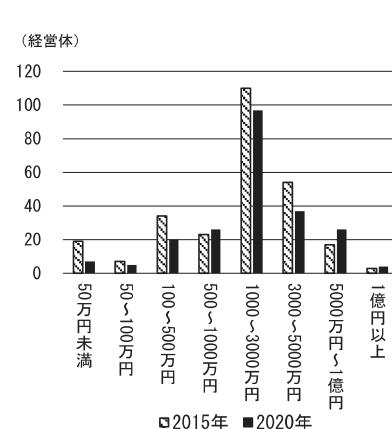
「500万円～1億円未満」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「50万円未満」の層は、2020年は2015年よりも約3倍に増加しています。

「10～20ha」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「1～5ha」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「1ha未満」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。



農産物販売金額規模別の農業経営体数は、「野菜」が最も多く、約6割を占めています。一方で、「畜産」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「畜産」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「穀類」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「果樹」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「その他の作物」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「肉用牛」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「酪農」の層は、2020年は2015年よりも約2倍に増加しています。

「胡瓜部会」は、平成二十三年に第三〇回日本農業賞集団組織の部で大賞を受賞したほか、ホクレン夢大賞（平成八年）やコーネブセツボ農業賞大賞（平成一九年）など、数々の受賞歴がある。

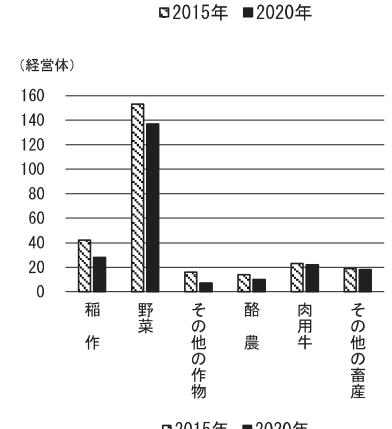


図 経営耕地面積規模別(上)・農産物販売金額規模別(中)・販売金額1位の部門別(下)農業経営体数

資料：農林水産省「農林業センサス」

トマト栽培を導入して半世紀、平取町は道内最大のトマト産地である。

JJAのトマト生産組合員の組織である「平取町野菜生産振興会トマト・胡瓜部会」は、平成二十三年に第三〇回日本農業賞集団組織の部で大賞を受賞したほか、ホクレン夢大賞（平成八年）やコーネブセツボ農業賞大賞（平成一九年）など、数々の受賞歴がある。

平成二三年度にはJJA販売額が四〇億円を突破し、以降は、作付面積で一二〇ha、販売数量で一万一千t、販売金額で四〇億円以上をおおむね維持しています。

「びりとリトマト」については、平成二四年にJJAが地域団体商標として登録し、表記の統一やその保護を図っています。トマトジュースやトマトピューレ、トマトケチャップなどの加工品ともどもお馴

や後作緑肥栽培による土づくり、熱水、有機物利用による土壤消毒など、環境に配慮した安全・安心なトマトづくりに努めている。こうした取り組みの積み重ねにより、消費者の信頼を確保し産地の評価を高めてきた。その象徴が「自根栽培」（原則として接ぎ木苗を使わない）へのこだわり染みの「ニシパの恋人」ブランドで販売している。ちなみに「ニシパ」とはアイヌ語で長老や紳士など尊敬される人を意味する。

トマト・胡瓜部会では品質の安定と安定供給を目的に、品種や作型、作型に応じた収穫段数の制限を定め徹底している。また、Yes! one an登録集団として化学肥料や農薬の節減、有機物の施用

に努めている。こだわりの「びらとりトマト」



びらとりトマト

収穫は五月上旬から一ヶ月半までの長期にわたって行われており、消費地へ安定的に出荷している。出荷先割合

で四番目となる和牛生産改良組合として認定を受けた。平成二八年には道内初となる和牛育種組合を設立しており、北海道内の黒毛和牛の育種・改良を先導してきた。また、子取り繁殖が主体の北海道内において、早くから肥育にも取り組み、「びらとり和牛」ブランドを築き上げてきた。

しかしながら近年は、高齢化や飼養戸数の減少により、

一方、黒毛和牛の導入は、トマト栽培が始まるおよそ一〇年前の昭和三七年に遡り、道内では歴史の古い産地の一つである。昭和五三年には、全国和牛登録協会から北海道

で四番目となる和牛生産改良組合として認定を受けた。平成二八年には道内初となる和牛育種組合を設立しており、北海道内の黒毛和牛の育種・改良を先導してきた。また、子取り繁殖が主体の北海道内において、早くから肥育にも取り組み、「びらとり和牛」ブランドを築き上げてきた。

しかしながら近年は、高齢化や飼養戸数の減少により、

町では、「びらとり和牛」

さうに歴史ある 「びらとり和牛」



びらとり和牛

のさうなる品質の向上と肉用牛生産者の生産基盤の拡充・強化を図ることを目的に、上位等級の牛肉を出荷した肥育牛生産者に支援金を、優良な繁殖素牛（雌牛）を導入または自家保留した肉用牛生産者に助成金を交付している。

一一月二六日に開催されたホクレン主催の「令和四年度北海道枝肉共励会（黒毛和種の部）」で、町内の肥育牛生産者が最優秀賞を受賞した。また、前の週に行われた「胆黒毛和種枝肉共励会」でも、平取町畜産公社が最優秀賞を獲得しており、ダブル受賞となつた。

有限会社平取町畜産公社は昭和四八年に、町とJJAが出資して設立した第三セクターであり、町営牧野の運営管理

や和牛の肥育事業（肥育試験含む）などを行っている。肥育事業には繁殖部門もあり、自家産の子牛やJHA管内で生産された子牛を市場で購入して肥育している。子牛生産者には公社の肥育結果を通知しており、人工授精用精液（種雄牛）の選定や繁殖牛の自家保留、育成方法改善などの参考資料として活用されるなど、和牛振興に大きな役割を果たしてきた。子牛価格の高値や配合飼料価格の高騰により公社経営は厳しく、繁殖部門を拡大していくとのことである。

牛肉産地としての最大の特徴は、地元でびらとり和牛を味わえることである。平成三〇年には「びらとり和牛認定店」を選定しており、町内の四店舗に加え、札幌市内の八

店舗を認定した。それぞれの店舗では、びらとり和牛を使つた独自の料理が提供されている。

新規参入に 新たな展開



就農相談会



農家研修

平取町は、トマト産地を維持するため、町外から新たに農業に参入する新規就農者（以下「新規参入者」）の受け入れに積極的に取り組んできました。近年では、農業後継者を含めた新規就農者総数の四割が新規参入者である。

受け入れはトマト栽培を対象に進めている。十分な自己資金があり、多少の困難があるても乗り越えられる意欲ある夫婦を農業研修生として選定。研修生は、一年目は一一月頃まで受け入れ農家のもとで農業全般を学ぶ。併せて道立農業大学校での経営研修や農業機械研修、生産部会等によ

る講習などを受講する。農家の研修を終了した一二月から翌年にかけては、町が整備した実践農場で、ベッド作りや苗の管理から定植後の栽培管理、収穫、出荷まで、トマト栽培にかかる全般の作業を行い、自立性を養っていく。一年間の研修終了後はJAHリース農場に就農する。

町では研修生に対し独自に、研修開始から就農後数年まで居住できる専用住宅の建設や賃貸住宅の確保、賃貸住宅の家賃の補助、就農時の設備投資（リース事業のリース料を含む）に対する助成、農業大学校での研修受講費用の助成などを行っている。先輩の新規参入者を含む農業者の受入協議会の存在も研修生には心強い。

の資材費高騰により、リース農場の整備費用が上昇していることもあり、中古物件で取得できる第三者継承による就農タイプも整備している。

トマト栽培農家が少しずつ減少する中で、今まで以上に新規参入者を増やしていくことが求められている。このため、これまでの夫婦での就農に加え、単身の就農希望者の受け入れも進める考え方である。一年目はトマト栽培全般の基礎を学ぶ「基礎研修」、二・三年目は割り当てられた区画で実際に栽培管理を行う「実践研修」、四年目以降は営農計画を立案して独立就農に準じた営農を行う「独立準備研修」と、夫婦型よりも長い研

令和二年度までに一九組の

修期間を経て就農をめざす。

町では今年度、これらの研修を行なう農場（ハウス）を整備している。就農も共同経営や第三者継承などさまざま

タイプを想定し、就農の実現に向け地域一体となったサポート体制を一層強化する考えである。また、一年目から二年

目の研修生は、地域おこし協力隊員として採用する計画であり、令和五年に、町のHPや新規就農者広告用HP等で農業支援員として二名の協力隊員を募集していく。

危惧される 農地の有効利用

大きな面積を必要とする経営体が少なく、農地の流動化があり進んでいない。こうした状況の中での水田活用直接支払交付金（以下「交付金」）の見直しは、農家の収入減少ばかりでなく、今後の農地の動向に大きな影響を及ぼしそうだ。

町内の転作は飼料作物（特に多年生牧草）栽培が大面積を占め、しかも中山間地域にある水田が多くて基盤整備も



水稻

十分ではない。今後も交付金

の対象となるための「水張りルール」を満たすことが厳しい状況にある水田が多いという。交付金の対象外となつた場合は耕作放棄が危惧され、農地の流動化や集約などによる農地の有効利用をいかに進めていくかが、大きな課題となることが想定される。

特産品で まちを元気に

町内の五つの飲食店で構成する「びらとり地産地消の会」では、びらとりトマトやびらとり和牛、平取黒豚など地元食材を使った店舗独自のメニューを提供する「ニシパの恋人ラノチ」を、夏季と冬季の半年ごとに内容を変えて提供して

いる。

「びらとり特産品魅力向上実行委員会」では、昨年の一〇月に「コーヒーさつぼろと提携し、町民に地場産の食材を使つたランチ」と「ティナーを提供する一日限りの「びらとりレストラン」を、翌日にはトマト生産者の畑で、町外からの参加者などにランチを提供する「畑でレストラン」を開催した。

平取高校では、JAの協力で学生のクラブ活動「トマトクラブ」が毎年、トマトなど地場産品を使った「新作料理のレシピ」を考案し、さまざまな場でPRしている。考案されたレシピは町内の学校給食にも採用され、年に数回

生が平取産食材の新しい魅力を発掘している。
平取町では政策として「健康づくりの町」を宣言した。「平取町食育推進計画」もこの宣言を踏まえて策定されている。
トマトは抗酸化作用のあるリコピンが豊富に含まれているほか、低カロリーでビタミンCやカリウム、食物繊維などをバランスよく含んでおり、「健康づくり」との相性はとてもよい。町では「食と健康」とトマトを代表する豊かな地場産品の

「健康づくりの町」を宣言した。「平取町食育推進計画」もこの宣言を踏まえて策定されています。この場を借りてお礼申し上げます。

特別研究員
二津橋 真一



地産地活を基本に、町民の健康づくりとまちの「元気づくり」を進めている。

平取町役場の皆様には、取材の対応や資料、写真の提供、原稿の確認など多くのご協力をいただきました。この場を